

# JLTA Newsletter No. 57

## 日本語テスト学会

### The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 57 発行代表者: 渡部良典 2024年(令和6年)9月30日発行  
発行所: 日本語テスト学会 (JLTA) 事務局  
日本語テスト学会事務局  
〒960-8516 福島県福島市栄町 10-6  
久保田恵佑研究室 (郵送時には必ず研究室名まで書いてください)  
TEL: 024-581-5533 (直通)  
E-mail: [kkubota@fmu.ac.jp](mailto:kkubota@fmu.ac.jp) URL: <http://jlta.ac>



\*\*\*\*\*

## ガリガリ君の夏

柳川 浩三 (法政大学)

毎夏、近くの海にシュノーケルに出かける。以前は友人と二人で行くことが多かったが最近は一人居る。海沿いの国道を左に折れ、半島を一周する県道に入る。そして、一つ目の信号脇にあるコンビニに車を止めノンアルコールビール1缶とつまみ1袋を買う。しばらく走ると海が遠方に見え、漁港を通り越してさらに半島の奥へと車を走らせると左手眼下に目的地の入り江がひろがる。9月に入ったばかりの平日の午後は人影もまばらだ。磯まで降り、折り畳み式のデッキチェアを広げて腰をおろすと、ノンアルコールビールの栓を開ける。台風一過で空気が澄んでいるせいか海の向こうの丹沢連峰と大山の山容が目眩しい。

「深さはどれぐらいですか」の声が私に気がつくまでに少し間があったようだ。気がついて右前方を見ると、声の主は私より年齢がひとまわりは上であろうか。海に入った後のようで、髪の毛は濡れ、黒い海水パンツ1枚に上半身は裸だ。なんでも40年ぶりに海で泳いでみたくなったそうで、都心のベッドタウンから一人で電車で揺られてこの小さな入り江を訪れたらしい。今夜は高台にある民宿に一人で泊まるという。言葉を交わした時間は10分もない。でも、一人がよくて、一人になりたくて私はこの海へ来たはずなのに、その人と出会って、話ができて何かとてもうれしかった。

英検の2次試験の面接官をさせてもらって今年で十余年になる。フリートークも含めてもわずか8分という短い時間の中で、受験者の歩んできた人生が垣間見えることがある。英検1級の2次試験に挑むというのは、私自身がそうであったように、多かれ少なかれ受験者にとっては機会であり挑戦であることを思い出す。受験者が与えられた5つのトピックから一つを選んで2分のスピーチをした後に、私ともう一人の面接官とのディスカッションが始まる。その際、私はスピーチで受験者が伝えきれなかったことや論理の飛躍や矛盾点を追いかけることにしている。そうして彼らの英語で話す力や思考力を推量し、受験者がその級に相応しいかを見極める。私の問いかけに受験者が呼応し、過不足のない回答や新しい視点を提供してくれる瞬間は楽しいし、そんな時は教室を出ていく受験者の顔にも達成感が溢れている。

でも、人と人による面接試験も AI の登場によってそう長くは続かないのではと思っている。2メートル越しに向き合う受験者と面接官の間には、対人であるからこそその緊張や不安といったテストの構成概念とは無関係要因 (construct irrelevant variance) が介入してくる。気まぐれな面接官よりも感情のない AI のほうが受験者にとっては精神的負担が少なく済み、公平で信頼性の高い評価が可能であろう。費用対効果も勝れているのであれば、もはや面接官が「人」である必要もない。

人対人のナマの対話こそが AI とのツルツルした対話よりも本物 (authentic) であり、意味深い (meaningful) とする主張は根拠に乏しい。人対人がいいという固定観念は、ある種のノスタルジーと一握りの面接官の思い上がりに過ぎないのかもしれない。

海からの帰路、例のコンビニに立ち寄り「ガリガリ君」を1本買った。キーンとした冷たさとソーダ味が火照った身体に溶け込んでいく。あっという間に姿形をなくしたガリガリ君の空棒をコンビニのごみ箱に放り投げると、今年の夏も終わりに近づいていた。

**Report on**  
**The 56th JLTA Research Seminar**  
**Mar. 9 (Sun) , 2024**  
**Zoom を用いたオンライン開催**  
**「英語要約ライティング学習・指導用オンライン教材の開発と評価」**

第56回日本言語テスト学会研究例会は、Zoom を用いたオンライン開催で「英語要約ライティング学習・指導用オンライン教材の開発と評価」と

いうテーマで実施された。英語要約ライティングの能力は、英語での学業従事や研究遂行上欠かせない能力である。本研究例会は、澤木泰代先生（早稲田大学）が JSPS 科研費（20H01292）研究代表者として開発を進められている W-Writing と呼ばれる英語要約ライティング学習・指導用オンライン教材について、二つの口頭発表とパネルディスカッションが実施され、英語要約ライティング学習について、活発な議論が交わされた。参加者は43名であった。

はじめに、「英語要約ライティング学習・指導用オンライン教材の概要と研究成果」というタイトルで、澤木先生、本報告書執筆者の石井雄隆、大井洋子先生（清泉女子大学）の発表が行われた。本科研の概観と理論的背景、システムの概要、Assessment Use Argument (Bachman & Palmer, 2010) に基づく妥当性研究結果について説明があった。

次に、徳永健伸先生（東京工業大学）、山田寛章先生（東京工業大学）による「LLM（大規模言語モデル）を活用した英作文自動フィードバックの検討」という発表が行われた。この発表では、近年耳目を集める生成 AI の仕組みについて徳永先生から説明があった後、W-Writing での生成 AI を活用した自動フィードバックの予備的検討について山田先生より報告があった。

最後に、本プロジェクトで開発している W-Writing のデモンストレーションが本報告書執筆者の石井雄隆によって行われた後、二つの口頭発表の発表者に加えて、マキュワン麻哉先生（早稲田大学）、マスワナ紗矢子先生（東京理科大学）を交えてパネルディスカッションを行った。マキュワン先生、マスワナ先生は学部生対象アカデミック・ライティング科目で実際に W-Writing を用いておられるため、実際の授業での活用事例について紹介していただき、その後フロアとシステムの利活用について議論を行った。

パネルディスカッションの後半では、教材としての W-Writing の活用をよりよいものとするためにどうすべきか、要約指導をアカデミック・ライティング指導に役立てるためにはどうすべきか、また英語教育における LLM をベースとしたフィードバックのあり方について登壇者とフロアの間で活発な議論が行われた。

本例会は英語ライティング指導に関わる研究者だけでなく、高等学校の英語の先生方などにとっても非常に有意義な会であったのではないかと感じる。当日ご出席をいただいた皆様方に心より感謝申し上げます。

**報告者 石井 雄隆 (千葉大学)**

**Report on  
The 57th JLTA Research  
Seminar**

**May 19 (Sun) , 2024**

**TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター**

**「若手研究者キャリアパス座談会・  
研究相談会」**

第 57 回日本言語テスト学会研究例会は、2024 年 5 月 19 日に TKP 市ヶ谷カンファレンスセンターで開催され、「若手研究者キャリアパス座談会・研究相談会」がテーマとして取り上げられた。本研究会は、研究者としてのキャリア形成を考える場の提供を目的としていた。対面とオンラインを合わせて 25 名が参加し、キャリアに関する多様な意見交換が行われた。

最初に、千葉大学・理化学研究所の石井雄隆先生、広島大学の山内優佳先生、福島大学の横内裕一郎先生が、それぞれのキャリアパスについてプレゼンテーションを行った。石井先生は、自身のキャリアを振り返り、学際研究の重要性やその際の異なる研究分野間での「異文化理解」の経験を強調した。自分の専門領域の知識を深め、自分を代表する「タグ」を作り増やしていく中で、様々な分野とのつながりの重要性を訴えた。山内先生は、大学院から現在に至るまでのキャリア形成の過程で直面した困難や博士号取得の意義について語り、研究と育児の両立など、公私両側面からの具体的なアドバイスをいただいた。横内先生は、大学院時代の経済的困難や就職活動での試練について触れ、研究者としてキャリアを進めるための具体的な戦略を示し、就職活動での研究業績の重要性を強調した。

続く座談会では、参加者からの質問に対し、大学就職の準備方法や修士号取得後のキャリアパス、研究の楽しさと困難について議論が行われた。各先生からの具体的なアドバイスや経験談は、若手研究者にとって大いに参考になるものであった。また、JLTA 若手研究者助成事業に関する情報も共有され、今後のキャリア形成に役立つ機会となった。

今回の研究会を通じて、若手研究者として異なる視点からのキャリア形成のヒントを得ることができた。また、3 人の先生方が一貫して強調していた「研究に打ち込むことの重要性」を再認識し、より一層研究に励むモチベーションが高まった。このような場が提供されることで、今後も若手研究者の成長とネットワークの構築が期待される。

**報告者 溝口 龍平 (早稲田大学大学院)**

**海外の学会・研究会  
参加報告  
World Conference Reports**

**大会： The 28th PAAL (Pan-Pacific Association of Applied Linguistics) International Conference**

**開催日： 2024年8月21日～8月22日**

**テーマ： The Evolving and Changing Status of English in the World**

**開催地： ソウル市（大韓民国）**

PAAL (環太平洋応用言語学会)は、1996年に早稲田大学と高麗大学の学術的協力から始まり、1999年に様々なアジアの国々の大学と研究者の協力と参加を得て、現在の名前となりました。今年の第28回大会は高麗大学で開催され、テーマは“The Evolving and Changing Status of English in the World”（世界における英語の進化とその変わりゆく地位）でした。

高麗大学 (Korea University) は1905年に設立された韓国のソウル特別市にある名門私立大学です。現在ではソウル大学、延世大学と共に「SKY」と呼ばれる名門校で受験戦争の厳しい韓国、そして国際的にも非常に高い評価を得ています。

高麗大学には2つのキャンパスがありますが、大会の行われた安岩 (アナム) キャンパスは、韓国の西洋のゴシック建築をモデルにした建物ときれいに整備された芝生が広がり、自分の学生にも留学を勧めたくなるような何とも美しいキャンパスです。コロナ禍でオンラインによる学会参加が続いたためか、まず会場の美しさに感銘を受け、そして有意義な研究発表とその後のディスカッションから大きな刺激を得ることができました。

基調講演は、マカオ大学の Andrew Moody 氏による「Performative Englishes: Unifying approaches to variation in world Englishes (表現する英語の変種：世界の英語の差異を統一するアプローチ)」というもので、発信能力の指導と評価において様々な英語の変種を認めながらもいかに共通する原則を発見し構築していくかという方法論を事例を挙げて説明されました。最も興味深かったのは、intelligibility や comprehensibility という「理解が可能かどうか」という概念と「authenticity (何が真正か)」という概念の重複部分と相容れない部分についての考察でした。これらの概念は全て状況に依存しますが、これから私たちがどんな英語を教え、どういう風にそれを評価して行ったらいいのかを真剣に考えなければならぬという思いを新たにしました。

この学会は2日間に約70件の口頭・ポスター発表が詰め込まれており、全部に参加することは不可能でしたが、全体がジャンルで分けられていたので（言語習得、TESOL、言語とテクノロジー、テキスト分析、心理言語学、言語と文化など）、TESOL、言語とテクノロジー、テキスト分析を中心に発表に参加しました。TESOL やテキスト分析の分野でも、実際に行ってみるとAIやコーパスなどを利用やその可能性に関する研究が多く、テクノロジーの浸透を強く感じると共に多くを学びました。オーストラリアの New South Wales 大学の5人の研究者によるオンライン学習に関する研究のメタ分析などは非常に参考になり、またその5人が様々なアジアの国からの留学生だという点が、この学会の特徴をよく表していました。タイの研究者によるタイの教員研修生の現状と課題についての発表や、インドネシアの研究者による謝罪表現の文化的感覚差の研究などは、日本と比較しながら興味深く聞きました。

私自身は、JACET テスト研究会の有志（宮崎啓先生、松本佳穂子先生）と一緒に日本の教師と学生の英語の intelligibility の感覚に関す

る調査結果を発表しましたが、会場から有益なフィードバックを頂きました。この学会の素晴らしいところは、アジア圏の国々の様々な視点からの質問やコメントが得られるところです、共通点もかなり違う点もありますが、そこがまたヒントに繋がったりします。

毎回大学院生の発表も多いので最優秀賞が表彰されるのですが、最優秀賞に選ばれた早稲田大学の博士課程の中国人留学生の発表も素晴らしいかったです。日本で学ぶ中国人留学生の自己意識やモチベーションの変化とその理由を分析した研究で、私も留学生を教える機会があるので非常に参考になりました。

英語が長い間世界の共通語として重要な役割を果たす中で、特にグローバル化により経済、教育や学術分野、文化も大きく変化し、現在教室内においては English as a lingua franca (ELF) や World Englishes の考え方をもとに、何をどう教えるか、そして評価をどのように行うかを考えることが重要になってきています。本大会はそのことを深く考える機会となりました。

報告者 土平 泰子 (聖徳大学)

### 書評

#### Article Reviews

**Martin, E. (2021). *Foundational Principles of Task-Based Language Teaching*. Taylor & Francis.**

**<https://doi.org/10.4324/9781003039709> (Open access)**

This book comprehensively delves into the foundational principles of task-

based language teaching (TBLT) and offers readers a thorough understanding of both theory and practice. This book is organized into three parts. Part I, titled "Theorising TBLT," includes three chapters (that is, Languages: How Are They Learned and How Should They Be Taught?; Input, Output, and Interaction—Crucial Foundations for TBLT; and the Construction of Tasks for the Purposes of TBLT). Part II, entitled 'Practising TBLT,' consists of three chapters (i.e., Putting TBLT into Practice: The Bigger Picture; Evaluating, Sequencing and Scaffolding Tasks; and Attending to Grammar in TBLT). Part III, which focuses on "Evaluating TBLT," is composed of three chapters (i.e., Using Tasks for Classroom Assessment Purposes; Classroom and Programme-level Evaluations of TBLT; and The Potential and the Challenge of TBLT: Arguments For and Arguments Against).

This book not only highlights key concepts but also provides practical applications that educators can implement in their classrooms. By addressing common misconceptions and presenting reflective questions at the end of each chapter, the text ensures that readers engage deeply with the material, making it an invaluable resource for teachers, researchers, and students. The comprehensive nature of this work allows it to serve as both an introduction to newcomers and a reference for seasoned practitioners seeking to enhance their understanding of TBLT.

While all the chapters provide essential aspects for improving second language teaching and learning, the following paragraphs focus on Chapter 7.

Chapter 7, titled "Using Tasks for Classroom Assessment Purposes," investigates how tasks can be effectively utilized to assess language learners' proficiency and progress in TBLT contexts. Martin East begins the chapter by emphasizing the importance of assessment in language education, noting that teachers and other education practitioners need reliable ways to evaluate students' learning and linguistic development. He introduces assessment as a process of collecting evidence on learners' language abilities to judge their proficiency levels and progress.

This chapter provides a helpful overview of the key assessment concepts and approaches, tracing the evolution from traditional discrete point and integrative testing methods to communicative language testing. East explains how task-based language assessment (TBLA) emerged as an extension of communicative testing, aiming to evaluate learners' ability to use language to accomplish real-world communicative goals.

A primary asset of the chapter is East's clear explanation of construct-based assessments in TBLA. He highlighted how tasks can be designed to elicit and measure specific aspects of language ability that align with the underlying theoretical constructs of TBLT.

This provides a foundation for task-based assessments that go beyond the simple usage of tasks in testing. East has also discussed the importance of considering task difficulty and complexity in developing assessments.

The author addresses critical issues of reliability and construct validity in TBLA, explores potential challenges, and highlights ways to enhance the trustworthiness of task-based assessments. He noted the importance of clear rating criteria and rater training to improve consistency, which undoubtedly results in a better picture of students' abilities to provide useful information.

East also touches on debates about the use of tasks in high-stakes testing contexts, such as IELTS, TOEFL, and TOEIC, which play a crucial role in determining students' educational and career opportunities. He argued that these tests often incorporate communicative elements, although they are not fully aligned with TBLT principles.

This chapter highlights three strengths and one area for enhancement. A key strength of this chapter is the maintenance of a balanced perspective throughout the text by East, recognizing both the potential benefits and limitations of TBLA approaches. He emphasizes that tasks should not be taken for granted as the only form of assessment to be used in the teaching-learning process but can be complemented by using them along with

other methods to provide a more comprehensive picture of learner proficiency. The author also acknowledges ongoing debates and areas requiring further research in the field of TBLA.

In addition, East provides a comprehensive yet substantive overview of the key issues in using tasks for language assessment. This chapter provides a solid foundation for readers to understand the core concepts and considerations of TBLA. East effectively links assessment practices to the theoretical foreground of TBLT, as discussed in earlier chapters.

Furthermore, the author's clear writing style and logical organization of the content make it easy to follow. The reflection questions at the end of the chapter prompt readers to connect the ideas with their own experiences, tapping back into their context. In addition, suggestions for further reading provide direction for those wishing to explore TBLT topics in depth.

One minor criticism is that the chapter could have benefited from more examples of task-based assessment instruments and scoring rubrics to illustrate the principles discussed.

Overall, this chapter makes a valuable contribution to the book by addressing the most critical areas of assessment in TBLT. East demonstrates how tasks can be maneuvered not only for instruction, but also for evaluation while maintaining alignment with TBLT

principles. This chapter provides teachers and researchers with a framework for developing valid task-based assessments to measure learners' communicative language abilities. In the broader context of the book, this chapter on assessment complements the earlier sections on TBLT theory and classroom implementation. This helps to complete the picture of how TBLT can be utilized across different aspects of language education.

In conclusion, Chapter 7 succeeds in its goal of shedding limelight on the foundational principles for using tasks in language assessment. This will assist readers with the knowledge required to critically examine and develop task-based testing approaches. This chapter convincingly argues for the benefits of TBLA while also being realistic about where it stands today. East's treatment of this complex topic strikes an effective balance between depth and accessibility, making the content relevant to both novice and experienced TBLT practitioners.

**評者: K. K. K. Samadhi NIKESHALA  
(Graduate school, University of  
Tsukuba)**

**JLTA 事務局より連絡**  
**Messages from JLTA Secretariat**

JLTA の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

- (1) 2024 年 10 月 5 日（土） - 6 日（日）に **第 27 回全国研究大会**が上智大学で開催される予定です。研究大会プログラム等の詳細は下記の研究大会ホームページからご確認ください。

事前参加登録期間は 10 月 2 日（水）までとなっております。参加を予定されている方は下記の URL より事前登録にご協力いただけますと幸いです。

URL:

<https://jlta27conference.peatix.com>

当日参加も受け付けております。研究大会当日皆さまに会えることを楽しみにしております。

研究大会 Website :

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=18](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18)

X (Twitter): @JLTA\_official

- (2) 『**日本語テスト学会誌**』 **第 27 号**は今冬発行予定です。冊子の配送と同時期に J-STAGE

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal> にて公開されます。バックナンバーを含め、ぜひご覧ください。

『**日本語テスト学会誌**』は、狭義のテストングに関するものだけでなく、広く評価に関する論文を募集しています。教育実践やプログラム評価に関するものなど、評価全般に関わ

る実験・知見を含みますので、どうぞふるってご応募ください。

- (3) 日本語テスト学会では、2019 年度より「**オンライン投稿審査システム**」を導入しました。このシステムは、2014 年度から学会業務の一部を委託してきた国際文献社が持つもので、投稿と査読の過程がオンライン上に記録されます。さらに、学会誌の一層の質の向上を目指して、既に出版された論文のデータベースを使った投稿論文の剽窃の確認や、著者による論文の匿名化の再確認もシステムの中で行います。2025 年度もこのシステムを使って投稿を受け付けます。詳細は次の通りです。

#### オンライン投稿審査システムに関する詳細

##### 1. システムのウェブサイト

<https://iap-jp.org/jlta/journal/login>

##### 2. 投稿期間

2025 年 4 月 7 日～2025 年 5 月 7 日

##### 3. 学会誌執筆要領・テンプレート

本システムの導入等により一部変更があります。最新の執筆要領やテンプレートをご参照ください。

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=62](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62)

##### 4. 問い合わせ先

日本語テスト学会誌 編集事務局  
[jlta-edit@bunken.co.jp](mailto:jlta-edit@bunken.co.jp)

- (4) **JLTA 研修講師派遣事業**が 2017 年度から始まりました。本事業は、テスト利用・作成に関わる研修を行う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うものです。会員の皆様におかれましては、言語テストングにご興味のある方々へご周知くださいますようお願いいたします。



ウェブサイト :

<http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

(5) **J-STAGE** (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>) における『日本言語テスト学会誌』のアクセス状況(2023年8月~2024年7月)について報告します。

2023年8月から2024年7月の期間の書誌への総アクセス数, PDF ファイルへの総アクセス数は, それぞれ14,281件(昨年10,908件)と12,162件(昨年10,291件)となっています。昨年度に比較するとそれぞれ約3,300件、1,900件増加しています。

国別のデータによると, 主なアクセス国に大きな変化はなく, アメリカ, 日本, 中国からのアクセスが大部分を占めております。全体的な傾向に変化はありませんが, 昨年度のアイランド(書誌事項), 今年度のシンガポール(書誌事項・PDF) やケニア(PDF) のように, 特定の国からのアクセスが増える傾向があります。

比較的新しい論文(2017年以降)スピーキング評価、波及効果、妥当性検証、ルーブリックに関連するものにアクセスが増えている傾向があります。

ダウンロード先とアクセス数

旧 : 2022/08~2023/07				
	国名	書誌事項	国名	PDF
1	アメリカ	3867	日本	3515
2	日本	2596	アメリカ	2637
3	中国	797	中国	933
4	アイランド	746	ドイツ	375
5	ドイツ	538	フィリピン	291
6	カナダ	463	イギリス	241
7	イギリス	195	フランス	210
8	韓国	171	オランダ	112
9	香港	168	インド	111
10	ブルガリア	152	カナダ	92

新 : 2023/08~2024/07

	国名	書誌事項	国名	PDF
1	アメリカ	4654	日本	4285
2	日本	3748	アメリカ	3495
3	中国	1693	中国	497
4	カナダ	778	シンガポール	456
5	韓国	588	フィリピン	318
6	シンガポール	492	イギリス	309
7	台湾	360	ドイツ	250
8	ドイツ	321	フランス	229
9	ロシア	263	カナダ	171
10	イギリス	238	ケニア	134

(6) 本学会ウェブサイトには, Web 公開委員会が公開を進めてくださった**チュートリアルとワークショップ・ビデオ**があります。どうぞ活用ください。

ウェブサイト :

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=808](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=808)

## WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

チュートリアル (Tutorial, 日本語)

- ・「よい」テストの条件 (What is a 'good' test?: validity, reliability, and practicality)
- ・テストの構成概念 (The concept of test constructs)
- ・テスト細目 (Test Specification)
- ・リーディングテスト (Testing Reading-6 basic test formats-)
- ・リスニングテスト (Testing Listening)
- ・ライティングテスト (Testing Writing)
- ・スピーキングテスト (Testing Speaking)
- ・語彙・文法テスト (Testing Vocabulary & Grammar)

- ・測定の標準誤差 (Standard Errors of Measurement)
- ・効果量とは？ (What is the 'Effect Size'?)
- ・学習に役立つテスト結果の報告 (Test result reporting to enhance learning)
- ・古典的テスト理論 (Classical Test Theory)
- ・確認的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis)
- ・メタ分析 (Meta-Analysis)
- ・質的方法 (Qualitative Methods)

- ・Workshop 1-3 初めて学ぶ効果量－実践編 (スライド)

2017

- ・Workshop – テキストマイニングを使った自由記述式アンケートの分析

2019

- ・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用 (前半)
- ・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用 (後半)
- ・配布資料

2021

- ・JLTA 2021 Workshop – 自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際 (前半)
- ・JLTA 2021 Workshop – 自律的学習者を育成する中学校外国語科授業の実際 (後半)
- ・配布資料

2023

- ・JLTA 2023 Workshop – Rを用いた一般化線形混合モデル (GLMM)の分析手法を身につける－言語研究分野の分析事例をもとに－ (前半)
- ・JLTA 2023 Workshop – Rを用いた一般化線形混合モデル (GLMM)の分析手法を身につける－言語研究分野の分析事例をもとに－ (後半)

#### ワークショップ・ビデオ (主に日本語)

2014

- ・Workshop 1 – CAT の基本的な考え方 (スライド)
- ・Workshop 2 – J-CAT (スライド 1, スライド 2,スライド 3)

2015

- ・Workshop 1 – テストデータ分析入門 (in English)
- ・Workshop 2-1 – 生徒の力を伸ばす定期テストの作り方－妥当性と信頼性に留意して (スライド)
- ・Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (スライド)

2016

- ・Workshop 1-1 初めて学ぶ効果量－入門編 (スライド)
- ・Workshop 1-2 初めて学ぶ効果量－理論編 (スライド)

#### (7) JLTA 著作賞の推薦について

JLTA では 2020 年度より「JLTA 著作賞」の表彰を行っています。推薦図書がある場合は、以下のページにある規程・テンプレートをご確認・ご記入の上、著作賞選考委員長

へ送付ください。なお、2025年度の締め切りは2025年3月31日となっております。送付先等詳細は、以下リンクをご参照ください。

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=1618](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618)

#### (8) 2024年度 JLTA 著作賞受賞者

2024年度の著作賞は、選考委員会による審議の結果、下記の著書が受賞いたしました。この度の受賞おめでとうございます。

##### 受賞対象著作：

書籍名：

*Understanding L2*

*Proficiency—Theoretical and meta-analytic investigations*

著者名：

Eun Hee Jeon & Yo In'nami (編)

出版社：John Benjamins Publishing Company

出版日：2022年8月4日

##### 受賞対象者(4名)：

共同編者兼執筆者

印南洋 氏(中央大学)

[受賞対象者代表]

執筆者

新井雄也 氏(早稲田大学)

小泉利恵 氏(筑波大学)

山下淳子 氏(名古屋大学)

[五十音順]

10月5日に上智大学にて開催予定の第27回全国研究大会の閉会行事にて授賞式を執り行わせていただきます。会員の皆さまもどうぞご参加ください。

#### (9) 学会会則改訂の進捗状況について

昨年度の会員総会にて学会会則の改訂が提案され、以降理事会での議論をもとに改定案の作成に取り組んでおります。現在の進捗状況について、10月5日に開催予定の第27回研究大会後の会員総会にてご報告させていただきます。研究大会にご参加の皆さまはあわせてご参加いただけますと幸いです。

#### (10) その他確認のお願い

● 会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ」はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください。

<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>

● 所属や書類発送先のご住所など登録情報に変更がある場合、上記マイページにてご自身で登録情報の変更を3月末までお願いいたします。

**特に、メールアドレス、住所(自宅・勤務先)の変更がある場合、確実に変更手続きをしていただくようお願いいたします。**

● 学生会員の方は、毎年学生証のコピーを会員状況確認のためご提出お願いいたします。

● 2023・2024年度の会費振込について、これからの方は早急によりしくお願いいたします。2023年度分のお支払いがない場合には、2025年4月より送付物の発送や電子メールの配信がなくなり、マイページの使用もできなくなります。

● 本会の退会を希望される方は、事務局(jlta-post@as.bunken.co.jp)へご連絡をお願いいたします。

文責：

JLTA 事務局長

久保田恵佑 (福島県立医科大学)

JLTA 事務局次長

前田啓貴 (松山大学)

松村香奈 (鶴見大学)

横内裕一郎 (福島大学)

日本語テスト学会 (JLTA) 公式

X (Twitter)アカウント: @JLTA\_official

[https://twitter.com/JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)

### Messages from the Secretariat

We are thankful for your support and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you have. Also, please see our English website for more details: [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=599](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=599)

#### (1) The 27th JLTA Annual Conference

will be held at Sophia University on October 5 (Sat)–6 (Sun), 2024.

For details regarding the conference program, please refer to the conference website.

([https://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=18](https://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18))

The early registration period is open until Wednesday, October 2nd. If you plan to attend, we kindly ask that you register in advance via the URL below.

URL:

<https://jlta27conference.peatix.com>

On-site registration is also available.

We look forward to seeing you there!

For the latest information, please visit [https://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=18](https://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18) or on the official X (Twitter) account (@JLTA\_official).

(2) **The *JLTA Journal* (vol. 27)** is currently in the printing process and will be sent to members' registered postal addresses soon. Previous volumes have been uploaded to J-STAGE

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>). We encourage you to visit this website and explore the back issues.

**The *JLTA Journal* invites various types of contributions that include studies related to evaluation in a broader sense**, such as classroom-based practice and program assessment that deal with issues and topics on testing and assessment.

(3) We have introduced an **"Online Submission and Review System"** since the academic year 2019. This system is organized by the International Academic Publishing Co., Ltd., which JLTA has commissioned part of JLTA's administrative work since 2014. Within this system, all submission and review processes will be recorded online. Furthermore, to improve the JLTA Journal's quality, submitted

manuscripts will be checked for plagiarism using a database of published articles and for anonymity using human resources.

## **Details about JLTA Online**

### **Submission and Review System**

#### **1. Website**

<https://iap-jp.org/jlta/journal/login>

#### **2. Submission period in 2025**

We only accepted submissions during the following period:

**April 7, 2025 to May 7, 2025**

#### **3. The Guidelines for Contributors and Templates**

The Guidelines for Contributors to the *JLTA Journal* and Templates have been revised due to the introduction of the system and other changes. Please see and follow the latest guidelines and templates before submission, which are located at:

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=62](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62) for details.

#### **4. Contact information** of the JLTA editing office:

[jlta-edit@bunken.co.jp](mailto:jlta-edit@bunken.co.jp)

(4) We have been working on the **JLTA Training Lecturer Dispatch project** since 2017, which aims to send a lecturer from JLTA to institutions and organizations wanting to hold a training session or meeting on test development and use. Please feel

free to convey this information to those who may be interested.

Website:

<http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

#### **(5) J-STAGE**

We report on the access status of *JLTA Journal* articles on J-STAGE (August 2023 – July 2024) (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>).

The total number of accesses to bibliographic entries and PDF files was 14,281 (compared to 10,908 last year) and 12,162 (compared to 10,291). This represents an increase of approximately 3,300 and 1,900 accesses compared to the previous year.

According to country-specific data, there have been no significant changes in the main countries of access, with the majority of traffic coming from the United States, Japan, and China. While the overall trend remains consistent, certain countries have shown increased access in specific categories, such as Ireland last year, and Singapore and Kenya this year.

There has also been an increase in access to relatively recent papers (published from 2017 onward) related to speaking assessment, washback effects, validation, and rubrics.

旧 : 2022/08~2023/07				
	国名	書誌事項	国名	PDF
1	アメリカ	3867	日本	3515
2	日本	2596	アメリカ	2637
3	中国	797	中国	933
4	アイルランド	746	ドイツ	375
5	ドイツ	538	フィリピン	291
6	カナダ	463	イギリス	241
7	イギリス	195	フランス	210
8	韓国	171	オランダ	112
9	香港	168	インド	111
10	ブルガリア	152	カナダ	92

新 : 2023/08~2024/07				
	国名	書誌事項	国名	PDF
1	アメリカ	4654	日本	4285
2	日本	3748	アメリカ	3495
3	中国	1693	中国	497
4	カナダ	778	シンガポール	456
5	韓国	588	フィリピン	318
6	シンガポール	492	イギリス	309
7	台湾	360	ドイツ	250
8	ドイツ	321	フランス	229
9	ロシア	263	カナダ	171
10	イギリス	238	ケニア	134

(6) Our website has various useful content for the public. It is our Web Publication Committee that is responsible for the creation and organization of content. Since some of the content posted is in English, we hope you use them to the fullest.

Website:

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=808](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=808)

## WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

Tutorial (in Japanese)

- What is a 'good' test?: validity, reliability, and practicality
- The concept of test constructs

- Test Specification
- Testing Reading-6 basic test formats
- Testing Listening
- Testing Writing
- Testing Speaking
- Testing Vocabulary & Grammar
- Standard Errors of Measurement
- What is the 'Effect Size'?
- Test result reporting to enhance learning
- Classical Test Theory
- Confirmatory Factor Analysis
- Meta-Analysis
- Qualitative Methods

## Workshop Videos

2014 (in Japanese)

- Workshop 1 – Basic Concepts of CAT
- Workshop 2 – J-CAT

2015

- Workshop 1 – Introduction to Test Data Analysis (in English)
- Workshop 2-1 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)
- Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)

2016 (in Japanese)

- Workshop 1-1 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Beginning Guide)
- Workshop 1-2 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Theoretical Guide)
- Workshop 1-3 Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Practical Guide)

2017 (in Japanese)

- Workshop – An Analysis of Free Descriptive Questionnaire by Text Mining

2019 (in Japanese)

- Workshop – Bayesian Statistics and its Application to Foreign Language Education Study
- Handouts

2021 (in Japanese)

- JLTA 2021 Workshop – Practice of Junior High School Foreign Language (English) Classes for Developing Autonomous Learners
- Handouts

2023 (in Japanese)

- JLTA 2023 Workshop – Acquiring Analytical Methods for Generalized Linear Mixed Models (GLMMs) Using R: Based on Examples of Analysis in the Field of Linguistic Research

(7) **Recommendation for the JLTA Book Award**

JLTA commenced the "JLTA Book Award" event in 2020. If there is a book you want to recommend for the award, please check and fill out the rules and templates on the link below, and send them to the Chair of the Book Award Selection Committee. Please refer to the link given below for shipping addresses. [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=1618](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618)

(8) **The JLTA Best Book Award 2024**

As a result of the deliberations by the committee, the following book has been awarded the 2024 JLTA Book Award. Congratulations on this achievement!

**Awarded Work:**

**Title:**

Understanding L2 Proficiency—Theoretical and Meta-Analytic Investigations

**Editors:**

Eun Hee Jeon and Yo In'nami

**Publisher:**

John Benjamins Publishing Company

**Publication Date:**

August 4, 2022

**Award Recipients (4 individuals):**

**Co-editor and Contributor**

Yo In'nami (Chuo University)  
[Lead Award Recipient]

**Contributors**

Yuya Arai (Waseda University)

Rie Koizumi (University of Tsukuba)  
Junko Yamashita  
(Nagoya University)

[List in alphabetical order]

The award ceremony will be held during the closing event of the 27th Annual Conference, scheduled to take place at Sophia University on October 5.

**(9) Progress on the Revision of the JLTA Constitution**

At the last year's general business meeting, a proposal to revise the constitution was presented. Since then, we have been working on drafting the revision based on discussions within the Board of Directors. We will provide an update on the current progress during the meeting, which will take place after the 27th Annual Conference scheduled for October 5.

**(10) Request for Confirmation**

● Have you visited the “My Page” site, where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment status? Please get in touch with us if you need your membership number and password, which are necessary details for the login.

<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>

● If you have changes in your affiliation, address, and other information, please update your

registered information on “My Page” by the end of March. **In particular, if you have changed your e-mail address or mailing address, please be sure to make the necessary changes.**

● We annually send student members a message asking them to submit a copy of a student certificate.

● If you have not yet paid the yearly membership fee for 2023 and 2024, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2023, you will receive no shipment or email message from JLTA and will not be able to use the “My Page” site after April 2025.

● If you plan to leave JLTA, please let us know by sending a message to [jlta-post@as.bunken.co.jp](mailto:jlta-post@as.bunken.co.jp)

**JLTA Secretary General**

**Keisuke KUBOTA**

**(Fukushima Medical University)**

**JLTA Vice Secretary General**

**Hiroki MAEDA**

**(Matsuyama University)**

**Kana MATSUMURA**

**(Tsurumi University)**

**Yuichiro YOKOUCHI**

**(Fukushima University)**

JLTA Official X (Twitter)account:

@JLTA\_official

[https://twitter.com/JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)





日本語テスト学会事務局

〒960-8516 福島県福島市栄町 10-6

久保田恵佑研究室（郵送時には必ず研究室名  
まで書いてください）

TEL: 024-581-5533（直通）

E-mail: [kkubota@fmu.ac.jp](mailto:kkubota@fmu.ac.jp)

URL: <http://jlta.ac>

編集： 広報委員会

委員長 土平泰子（聖徳大学）

副委員長 長沼君主（東海大学）

委員

笠原究（北海道教育大学旭川校）

宮崎啓（東海大学）

古賀功（龍谷大学）